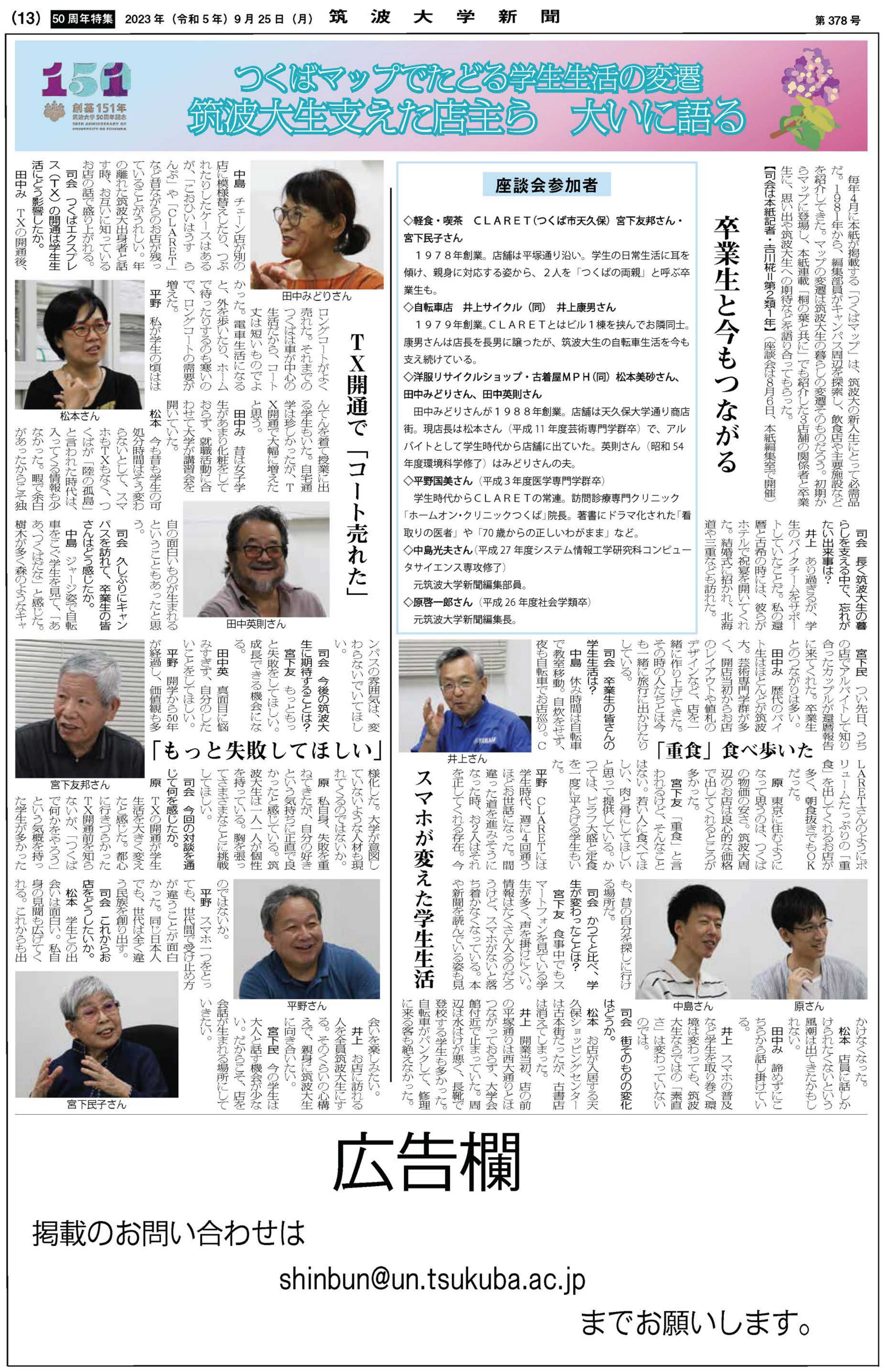


(13) 50周年特集 2023年（令和5年）9月25日（月） 筑波大学新聞 第378号

つくばマップでたどる学生生活の変遷 筑波大生支えた店主ら　大いに語る

創基151年 筑波大学50周年記念 50TH ANNIVERSARY OF UNIVERSITY OF TSUKUBA

卒業生と今もつながる

毎年4月に本紙が掲載する「つくばマップ」は、筑波大の新入生にとって必需品だ。1981年から、編集部員がキャンパス周辺を探索し、飲食店や主要施設などを紹介してきた。マップの変遷は筑波大生の暮らしの変遷そのものだろう。初期からマップに登場し、本紙連載「桐の葉と共に」でも紹介した3店舗の関係者と卒業生に、思い出や筑波大生への期待などを語り合ってもらった。

【司会は本紙記者・吉川椛＝第2類1年】（座談会は8月6日、本紙編集室で開催）

座談会参加者

◇軽食・喫茶　CLARET（つくば市天久保）宮下友邦さん・宮下民子さん

　１９７８年創業。店舗は平塚通り沿い。学生の日常生活に耳を傾け、親身に対応する姿から、２人を「つくばの両親」と呼ぶ卒業生も。

◇自転車店　井上サイクル（同）　井上康男さん

　１９７９年創業。ＣＬＡＲＥＴとはビル１棟を挟んでお隣同士。康男さんは店長を長男に譲ったが、筑波大生の自転車生活を今も支え続けている。

◇洋服リサイクルショップ・古着屋ＭＰＨ（同）松本美砂さん、田中みどりさん、田中英則さん

　田中みどりさんが１９８８年創業。店舗は天久保大学通り商店街。現店長は松本さん（平成11年度芸術専門学群卒）で、アルバイトとして学生時代から店舗に出ていた。英則さん（昭和54年度環境科学修了）はみどりさんの夫。

◇平野国美さん（平成３年度医学専門学群卒）

　学生時代からＣＬＡＲＥＴの常連。訪問診療専門クリニック「ホームオン・クリニックつくば」院長。著書にドラマ化された「看取りの医者」や「70歳からの正しいわがまま」など。

◇中島光夫さん（平成27年度システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻修了）

　元筑波大学新聞編集部員。

◇原啓一郎さん（平成26年度社会学類卒）

　元筑波大学新聞編集長。

司会　長く筑波大生の暮らしを支える中で、忘れがたい出来事は？

井上　あり過ぎるが、学生のバイクチームをサポートしていたことだ。私の還暦と古希の時には、彼らがホテルで祝宴を開いてくれた。結婚式に招かれ、北海道や三重なども訪れた。

宮下民　つい先日、うちの店でアルバイトして知り合ったカップルが還暦報告に来てくれた。卒業生とのつながりは多い。

田中み　歴代のバイト生はほとんどが筑波大。芸術専門学群が多く、開店当初からお店のレイアウトや値札のデザインなど、店を一緒に作り上げてきた。その時の人たちとは今も一緒に旅行に出かけたりしている。

「重食」食べ歩いた

司会　卒業生の皆さんの学生生活は？

中島　休み時間は自転車で教室移動。自炊をせず、夜も自転車でお店巡り。CLARETさんのようにボリュームたっぷりの「重食」を出してくれるお店が多く、朝食抜きでもOKだった。

原　東京に住むようになって思うのは、つくばの物価の安さ。筑波大周辺のお店は良心的な価格で出してくれるところが多かった。

宮下友　「重食」と言われるけど、そんなことはない。若い人に食べてほしい、肉と骨にしてほしいと思って提供している。かつては、ピラフ大盛と定食を一度に平らげる学生もいた。

平野　CLARETには学生時代、週に4回通うほどお世話になった。間違った道を進みそうになった時、お2人はそれを正してくれる存在。今も、昔の自分を探しに行ける場所だ。

スマホが変えた学生生活

司会　かつてと比べ、学生が変わったことは？

宮下友　食事中でもスマートフォンを見ている学生が多く、声を掛けにくい。情報はたくさん入るのだろうけど、スマホがないと落ち着かなくなっている。本や新聞を読んでいる姿も見かけなくなった。

松本　店員に話しかけられたくないという風潮は出てきたかもしれない。

田中み　諦めずにこちらから話し掛けている。

井上　スマホの普及など学生を取り巻く環境は変わっても、筑波大生ならではの「素直さ」は変わっていないのでは。

司会　街そのものの変化はどうか。

松本　お店が入居する天久保ショッピングセンターは古本街だったが、古書店は消えてしまった。

井上　開業当初、店の前の平塚通りは西大通りとはつながっておらず、大学会館付近で止まっていた。周辺は水はけが悪く、長靴で登校する学生も多かった。自転車がパンクして、修理に来る客も絶えなかった。

中島　チェーン店が別の店に模様替えしたり、つぶれたりしたケースはあるが、「こおひいはうす　らんぷ」や「CLARET」など昔ながらのお店が残っていることがうれしい。年の離れた筑波大出身者と話す時、お互いに知っているお店の話で盛り上がれる。

TX開通で「コート売れた」

司会　つくばエクスプレス（TX）の開通は学生生活にどう影響したか。

田中み　TXの開通後、ロングコートがよく売れた。それまでのつくばは車が中心の生活だから、コート丈は短いものでよかった。電車生活になると、外を歩いたり、ホームで待ったりするのも寒いので、ロングコートの需要が増えた。

平野　私が学生の頃ははんてんを着て授業に出る学生もいた。自宅通学は珍しかったが、TX開通で大幅に増えたと思う。

田中み　昔は女子学生があまり化粧をしておらず、就職活動に合わせて大学が講習会を開いていた。

松本　今も昔も学生の可処分時間はそう変わらないとして、スマホもTXもなく、つくばが「陸の孤島」と言われた時代は、入ってくる情報も少なかった。暇で余白があったからこそ独自の面白いものが生まれるということもあったと思う。

司会　久しぶりにキャンパスを訪れて、卒業生の皆さんはどう感じたか。

中島　ジャージ姿で自転車をこぐ学生を見て、「あ、つくばだな」と感じた。樹木が多く森のようなキャンパスの雰囲気は、変わらないでいてほしい。

「もっと失敗してほしい」

司会　今後の筑波大生に期待することは？

宮下友　もっともっと失敗をしてほしい。成長できる機会になる。

田中英　真面目に悩みすぎず、自分のしたいことをしてほしい。

平野　開学から50年が経過し、価値観も多様化した。大学が意図していないような人材も現れてくるのではないか。

原　私自身、失敗を重ねてきたが、自分の好きという気持ちに正直で良かったと感じている。筑波大生は一人一人が個性を持っている。胸を張ってさまざまなことに挑戦してほしい。

司会　今回の対談を通じて何を感じたか。

原　TXの開通が学生生活を大きく変えたと感じた。都心に行きづらかったTX開通前を知らないが、「つくばで何かをやろう」という気概を持った学生が多かったのではないか。

平野　スマホ一つをとっても、世代間で受け止め方が違うことが面白かった。同じ日本人でも、世代は全く違う民族を創り出す。

司会　これからお店をどうしたいか。

松本　学生との出会いは面白い。私自身の見聞も広げてくれる。これからも出会いを楽しみたい。

井上　お店に訪れる人を全員筑波大生にする。そのくらいの心構えで、親身に筑波大生に向き合いたい。

宮下民　今の学生は大人と話す機会が少ない。だからこそ、店を会話が生まれる場所にしていきたい。

田中みどりさん

松本さん

田中英則さん

宮下友邦さん

宮下民子さん

平野さん

井上さん

中島さん

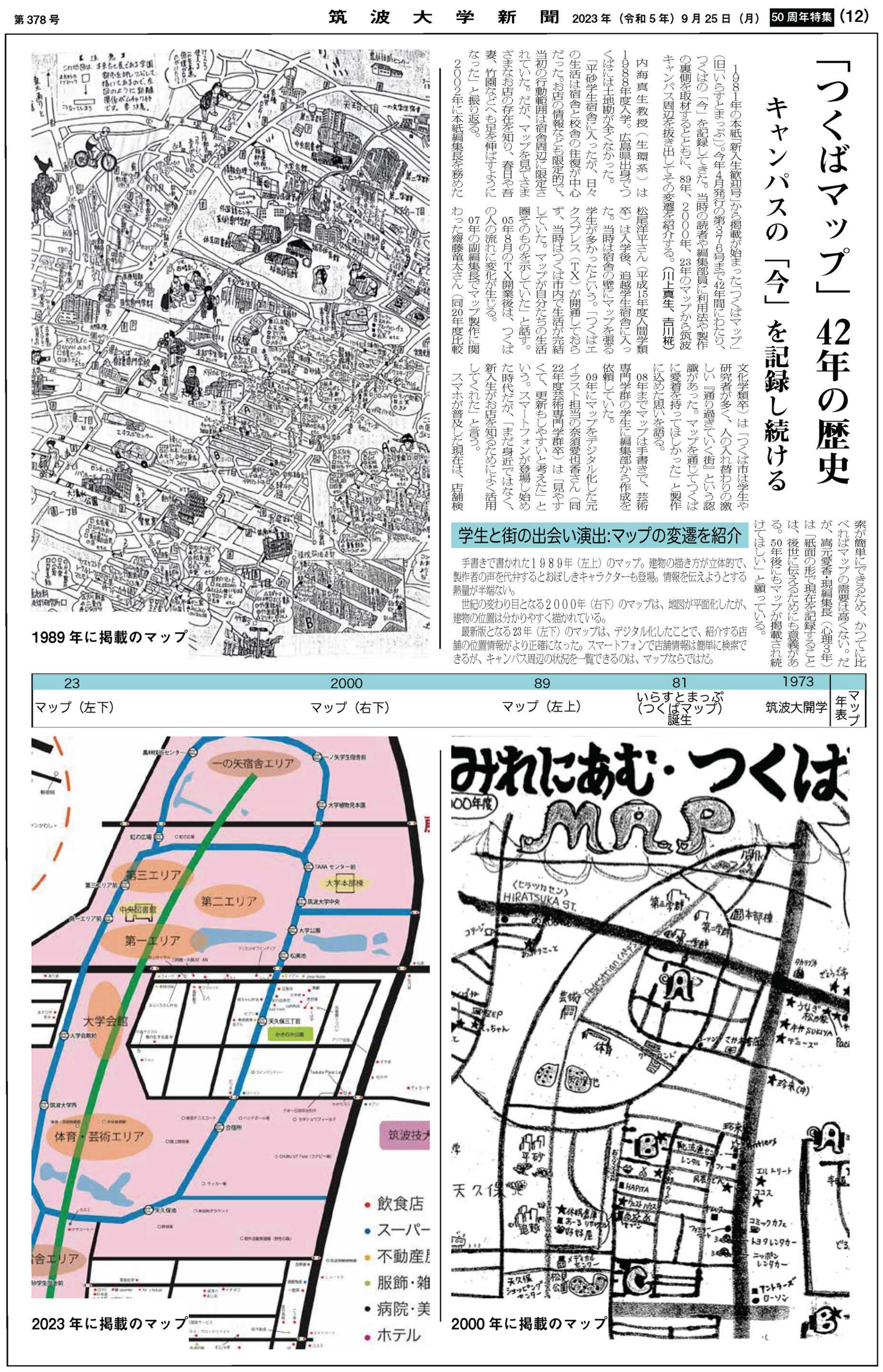
原さん

広告欄

掲載のお問い合わせは

shinbun@un.tsukuba.ac.jp

までお願いします。



第378号 筑波大学新聞 2023年（令和5年）9月25日（月） 50周年特集 (12)

「つくばマップ」42年の歴史

キャンパスの「今」を記録し続ける

1981年の本紙「新入生歓迎号」から掲載が始まった「つくばマップ」（旧「いらすとまっぷ」）。今年4月発行の第376号まで42年間にわたり、つくばの「今」を記録してきた。当時の読者や編集部員に利用法や製作の裏側を取材するとともに、89年、2000年、23年のマップから筑波キャンパス周辺を抜き出してその変遷を紹介する。**（川上真生、吉川椛）**

内海真生教授（生環系）は1988年度入学。広島県出身でつくばには土地勘が全くなかった。

「平砂学生宿舎に入ったが、日々の生活は宿舎と校舎の往復が中心だった。お店の情報なども限定的で、当初の行動範囲は宿舎周辺に限定されていた。だが、マップを見てさまざまなお店の存在を知り、春日や吾妻、竹園などへも足を伸ばすようになった」と振り返る。

2002年に本紙編集長を務めた松尾洋平さん（平成15年度人間学類卒）は入学後、追越学生宿舎に入った。当時は宿舎の壁にマップを張る学生が多かったという。「つくばエクスプレス（TX）が開通しておらず、当時はつくば市内で生活が完結していた。マップが自分たちの生活圏そのものを示していた」と話す。

05年8月のTX開業後は、つくばの人の流れに変化が生じる。

07年の副編集長でマップ製作に関わった齋藤竜太さん（同20年度比較文化学類卒）は「つくば市は学生や研究者が多く、人の入れ替わりの激しい『通り過ぎていく街』という認識があった。マップを通じてつくばに愛着を持ってほしかった」と製作に込めた思いを語る。

08年までマップは手書きで、芸術専門学群の学生に編集部から作成を依頼していた。

09年にマップをデジタル化した元イラスト担当の奈須愛也香さん（同22年度芸術専門学群卒）は「見やすくて、更新もしやすいと考えた」という。スマートフォンが登場し始めた時代だが、「まだ身近ではなく、新入生がお店を知るためによく活用してくれた」と言う。

スマホが普及した現在は、店舗検索が簡単にできるため、かつてに比べればマップの需要は高くない。だが、嵩元愛香・現編集長（心理3年）は「紙面の形で現在を記録することは、後世に伝えるためにも意義がある。50年後にもマップが掲載され続けてほしい」と願っている。

学生と街の出会い演出:マップの変遷を紹介

手書きで書かれた１９８９年（左上）のマップ。建物の描き方が立体的で、製作者の声を代弁するとおぼしきキャラクターも登場。情報を伝えようとする熱量が半端ない。

世紀の変わり目となる２０００年（右下）のマップは、地図が平面化したが、建物の位置は分かりやすく描かれている。

最新版となる23年（左下）のマップは、デジタル化したことで、紹介する店舗の位置情報がより正確になった。スマートフォンで店舗情報は簡単に検索できるが、キャンパス周辺の状況を一覧できるのは、マップならではだ。

23	2000	89	81	1973	マップ年表
マップ（左下）	マップ（右下）	マップ（左上）	いらすとまっぷ（つくばマップ）誕生	筑波大開学	

1989年に掲載のマップ

2023年に掲載のマップ

2000年に掲載のマップ

つくばマップ特集

　筑波大学開学50周年記念特集号に掲載した「つくばマップ特集」の紙面です。12面でつくばマップの変遷を紹介し、13面で筑波大生と共に歩んでこられた店舗の関係者の方々による座談会を掲載しました。「TXの開通でコートがよく売れるようになった」など、研究学園都市の歴史を知る関係者だからこそ分かるエピソード満載の紙面です。